人は死んだらどこにいくのでしょうか
星になるのでしょうか
無になるのでしょうか
天国や地獄に行くのでしょうか
生きている私たちにはわかりません
けれど、
その人が生きていたしるしは生きている人たちの中にあります
墓前で手を合わせるときと同じように
海を見るたび思い出してほしい

■問題提起

死には階級が存在する。
人がだくなったとき、残された人々は葬儀を行い、火葬し、お墓に遺骨を納めることが一般的である。
その過程の中で、遺族は葬儀のための祭壇や花の種類、棺や墓石の材質など、どれを使用するか選択を迫られる。
これらの選択肢には、葬儀業者によって設定された値段が存在し、「死」が商品として扱われていると感じる。
またこの値段わけがあることによって、死は階級づけられてしまっている。
どんな人にも死は平等に訪れる。

■社会背景

近年、日本では核家族化が進んでいる。
それに伴い、かつては一族でひとつのお墓が主流だったが、一家族で一つのお墓を持つことも増えてきている。
しかし、環境破壊といった観点から、お墓の面積の確保が難しくなり始め、お墓の値段が高騰し、居住地から離れた場所にしかお墓を持てないという問題も起こっている。
このような社会的な流れを受け、新しい葬送方法として自然葬が注目され始めている。
自然葬とは、人工的な墓標を持たず、自然に人間を還すという葬送方法である。

以上のことを踏まえて問題点を整理すると

・死の階級化　・墓不足　・居住地と墓の距離

と言うことができる。

■提案

平等な死の在り方の例として、墓標を用いない海洋葬を採用し、それに伴い海を意識させる設計を行い、故人と残された人々が心穏やかに過ごすことができ

■機能

葬儀場＋火葬場＋共同墓地

葬儀場　・・・　エントランスホール・ホール・待合室・待合ロビー・事務室
火葬場　・・・　告別室・炉前ホール・炉室・収骨室・待合室・待合ロビー・事務室
共同墓地　・・・　納骨堂・展望台

海洋葬とは
遺体を火葬した後、遺骨を海に散骨する葬送方法。
形式や慣習にとらわれず、死後は自然に還りたいという人が増加し、近年注目され始めている。
墓標はたてないため、海そのものが墓標となったり、散骨した方角へ手を合わせたりする。
自然葬の一種であり、他に樹木葬などの種類がある。

■敷地

三重県鳥羽市堅神町
鳥羽水族館があることで有名な鳥羽市は、リアス式海岸を利用した牡蠣や真珠といった養殖産業が盛んである。
水族館も養殖業も海からの恩恵を受け成り立つものであり、地域住民にとって海は親しい存在であると言える。
一方で、高齢化が進行しつつあり、平成 25 年度の調査では人口の約 30％が高齢者であるという結果が出ている。

アクセス
近鉄鳥羽線池の浦
駅から徒歩 10 分
鳥羽駅からは車で
約 5 分

火葬場
岬に位置し、最も海との一体感を感じることのできることのできる場とする。
北直線軸上に散骨場を臨む。

葬儀場
西向きに配置し、待合室からは日が落ちる様子を眺めることができる。
一部建物を 45 度にふることで、火葬場とのつながりを持たせている。

回遊路
山の西側に沿うかたちで道を整備する
途中に海まで続く階段があり、人々の休憩場所やちょっとした広場にもなる。

駐車場
最大収容数 22 台。
ほとんどの人はここで車から降り、敷地を歩いて移動する。

港
火葬場で収骨を終えた人々はこの港から旅立つ。
潮は山に向傾的につながり、海へと向かって白く伸びる。

トンネル
この地域一体に入る入口として、このトンネルが静かに存在する。
門としての役割を果たし、これをくぐることによって、
以降の空間が今までとは違う穏やかな空間であることを認識させる。

共同墓地
山の頂上付近に配置し、
展望台からは敷地一帯を見渡すことができる。
お盆などの行事の際にはここへお参りにくる。

山ひとつを用いて計画する。
各建物は道路や歩道でつながり、相互に関係する。
電車から目につきやすい山の西側はあまり手を加えない。

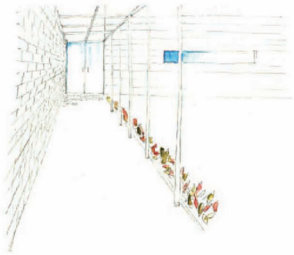
N
配置図　S=1：1000

■コンセプト
以下の 3 点に着目し、設計を行う。

Sea　散骨を行う海を意識させるため、どの建物からでも海を見えるようにさせる。
各建物で海を見る角度を変えることで、異なる海の表情を見せる。

Road　各建物にバラバラに配置された建物は車道と歩道で蜘蛛の巣のようにつながりあう。

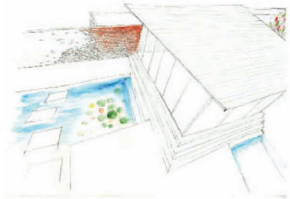
Light　葬送空間は訪れる者にとって様々な感情を惹起させる体験である。
その体験をより印象的にするために光を用いる。
葬儀場ではホール、火葬場では炉前ホールにおいて光の挿入方法に工夫を行った。
共同墓地では、納骨堂にあえて光を入れないことで静謐な空間とした。

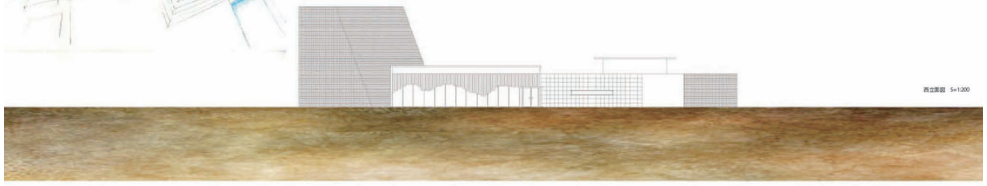


平面図　S=1：200

葬儀場

わきに咲く花を横目にアプローチを抜けて建物へと入る。
エントランスホールから葬儀場へ入るとまず目に入るのは天井まで伸びる窓である。故人が天へと昇っていくようなイメージを想起させる。
待合ロビーの外には水が張られ、海とはまた違う水の静けさを感じ、心を落ち着かせることができる。




西立面図　S=1:200

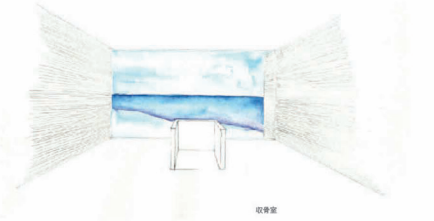
断面図　S=1:200

火葬場

入口を入ってすぐのエレベーターで地下に降りる。
告別室で別れを告げ、扉をくぐると本を逆さにした光が降りそそぐ炉前ホールに出る。
海中にいるかのような空間で故人を見送り、待合室で煙突から煙が上るのを待つ。
煙が上がり、収骨室へ行くとピンと張られた水面と連続して海が見える。

1階平面図　S=1:200

炉前ホール

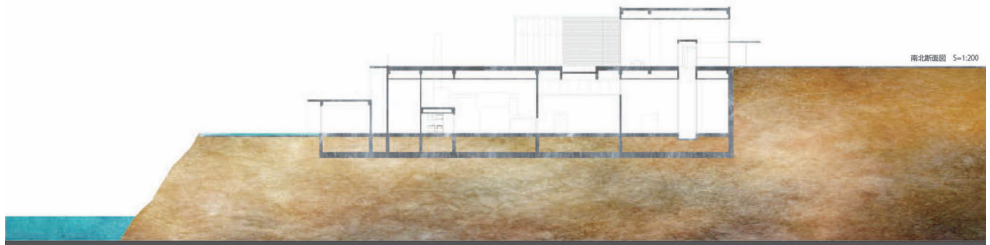


収骨室

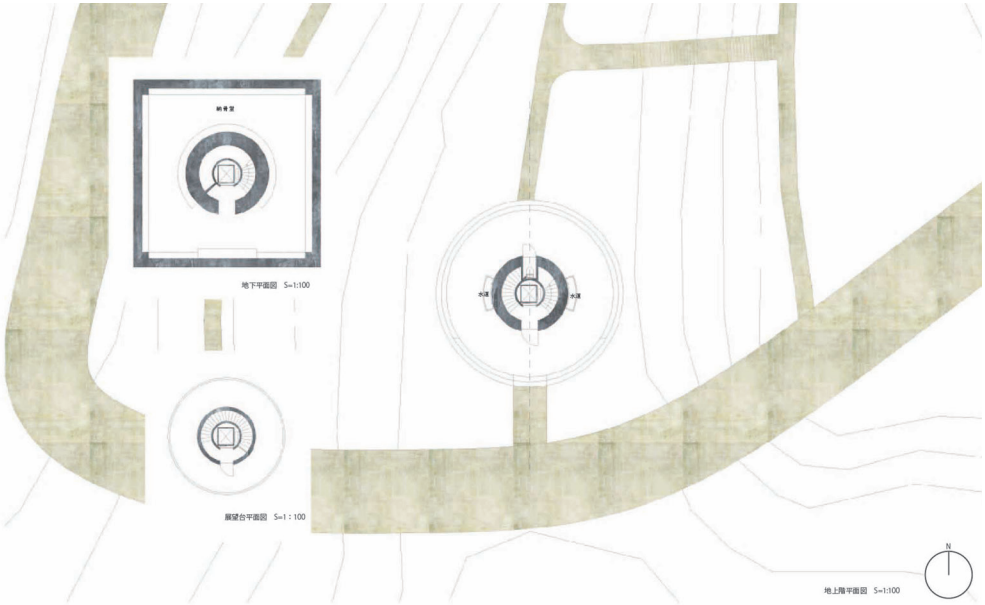
煙突

地下平面図　S=1:200

南立面図　S=1:200

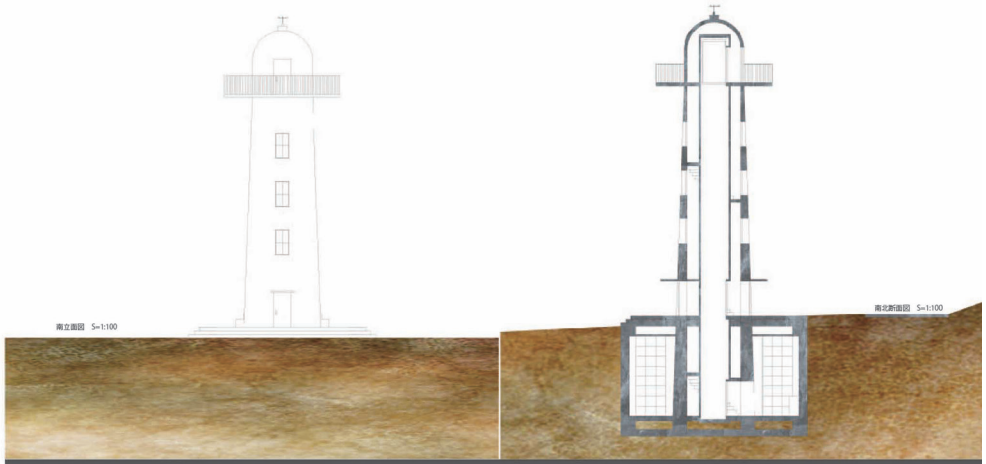


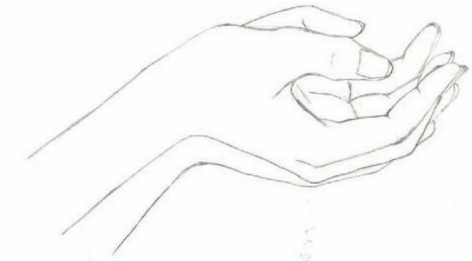
南北断面図　S=1:200



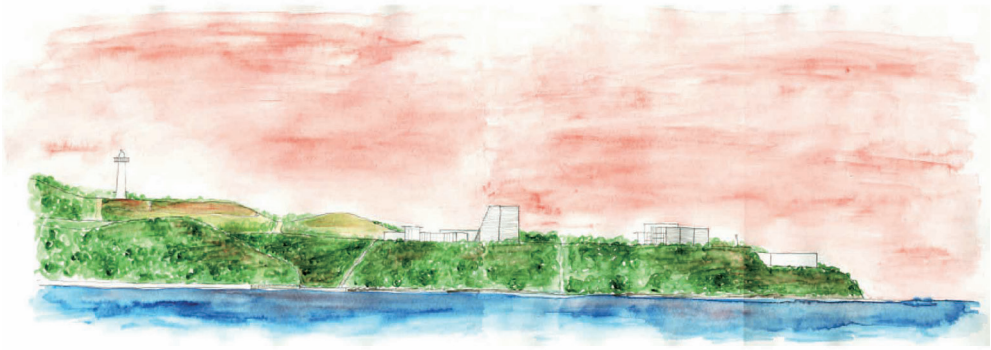
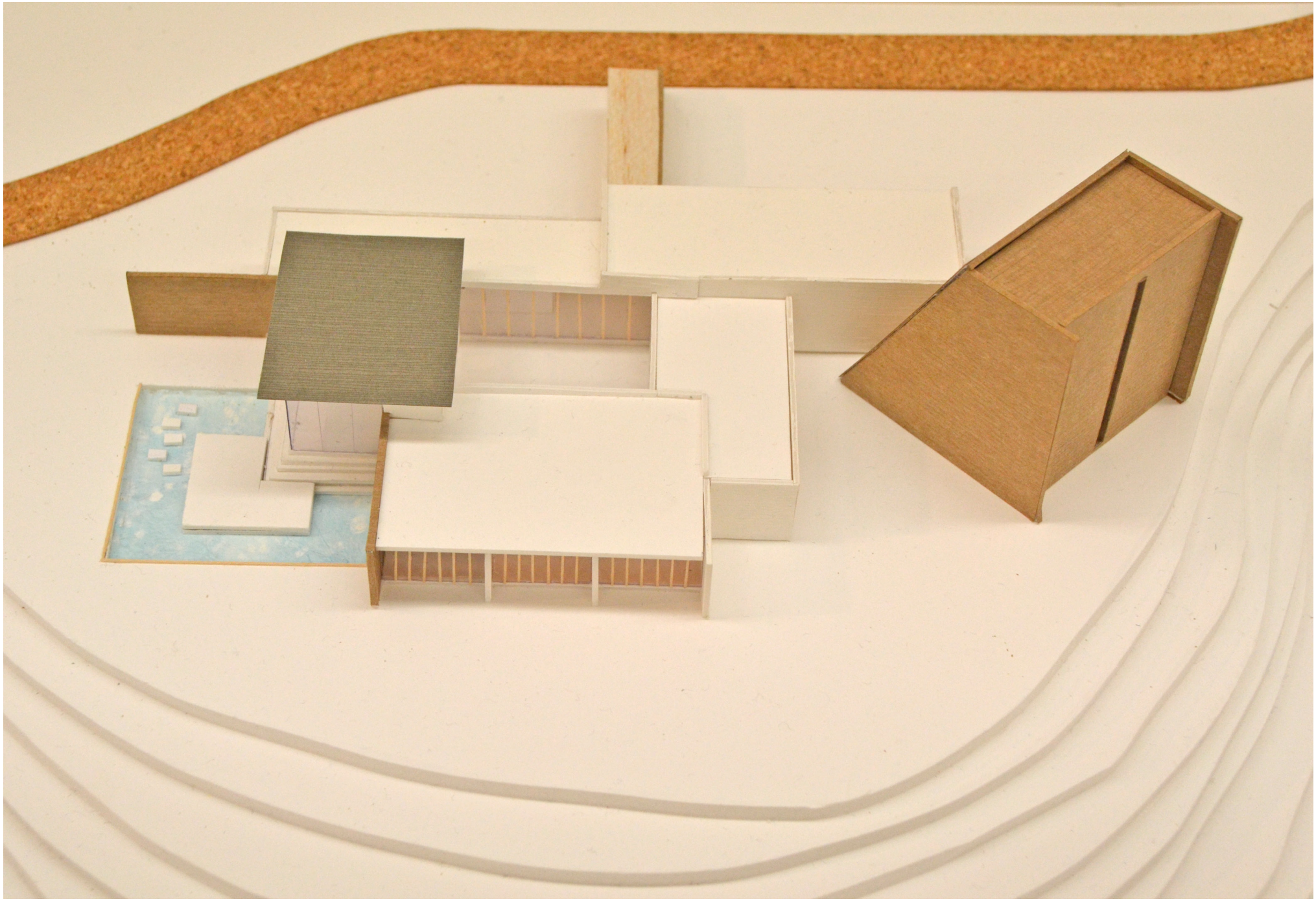
共同墓地

灯台を模した形で、展望台となっている。
この展望台からは敷地を一望でき、それぞれの建物や海を眺めながら物思いにふけることができる。
建物を通り過ぎると、そこは花壇となっており、参拝者が自由に花を植えたり、水をやったりする。
地下には納骨堂が設けられ、散骨を希望しない人はここで眠ることができる。





いつか、
命の糧となる



西側より敷地を見る